平成２８年度　第３回鳥取市行財政改革推進市民委員会・会議概要

日　時：平成 28 年 12 月 26 日（月）　午前 10 時から正午
会　場：鳥取市役所　本庁舎 4 階　第 3 会議室
出席者：≪委員≫
山下 恭史　委員長、山下 博樹　副委員長、川口 耕　委員、石畑 美幸　委員、
玉木 真人　委員、福山 裕正　委員
≪鳥取市≫
坂本行財政改革課長、河上行政経営係長、藤原主任、岩田主任

会議概要（事務局による要約）

1. 開会

河上係長　：

それでは定刻になりましたので、これより平成２８年度第３回行財政改革推進市民委員会を開催いたします。本委員会の設置要綱第５条第２項に、「委員会は委員の半数以上の出席がなければ会議を開くことができない」とされていますが、本日は全１０名のうち６名の方にご出席いただいておりますので、本日の会議が成立していることをご報告いたします。では開会にあたりまして、山下委員長よりご挨拶お願いいたします。

2. あいさつ

山下恭史委員長:

年末の慌ただしい時期の開催となりましたが、その合間を縫ってご出席いただきましてありがとうございます。年末を迎えまして今年一年様々なニュースがありましたが、やはりこの地域においては石浦関の快進撃ですとか鳥取県中部の地震ですとか、良い話題も悪い話題もございましてけれど、こういった社会の流れの中で自分たちに何ができるのか、自治体はもちろん企業あるいは組織として、一人一人が考え行動していかなければいけないことだなと改めて思い起こしておりました。

さて今日はたくさんの資料が用意してありますが、これは各課の取り組み内容や自己評価に対して、ご多忙の合間を縫って皆さまに再評価とご質問・ご意見をお寄せいただいたことによって出来たものであります。本当にお忙しい中、無理なお願いをした形になってしまいましたが、どうしても委員会の進行上、皆さまに行財政の大綱の中にある個々の取り組みについて一目触れていただきたかったということと、すべての事業を委員会の中で議論しきれませんが、できる範囲で大綱への一定の評価をまとめておきたいというようなところからご無理言った次第であります。本当にありがとうございました。

本日、欠席の委員さんもいらっしゃいますが、その委員さんからもご意見等頂戴しております。短い時間ではありますけども、充実した議論になるように期待しまして冒頭のあ

いさつとさせていただきます。今日はよろしくお願いします。

河上係長:

ありがとうございました。それでは以後の進行は委員長様お願いいたします。

3. 議事

山下恭史委員長:

次第に沿って進めていきます。まず議事の（１）については「４つのIDに関する事前質問への回答と内容協議」ということですが、４つのIDというのは添付資料２のID２８、３７、３８、７５です。議事に入る前に、この位置づけが皆さんも分かりづらいと思いますので話しておきたいと思います。この委員会は平成３０年３月までで１２回予定しており、今日はその３回目です。１２回目の時には最終的な総括をいたしますが、２年間近くの長丁場ですので、できれば１年ずつ区切っていきたいと思っております。初年度の平成２８年度は３月までに計５回。今日を含めてあと３回の中で、この４つのIDに関する評価シートの「行財政改革推進市民委員会の意見」という欄にある程度の意見が集約できればいいかなと思っております。そのために今回はこの４つについて集中的に議論をさせていただきまして、まとまらなければあるいは分からないことがあれば次回または次々回に担当課をお呼びして議論していきたいと思います。そして、当初申し上げましたが、その議論の中で新しい提案ですとか、こういう方向性があったらいいなといった新しいものが副次的にでも生まれ出てくればというように考えております。

そして、IDはこの４つだけではなくて全部で７８もありますので、この４つID以降どういうものを取り上げて議論していくかということについても、皆さんのご意見も伺いながら事務局と調整して今年度中に決めていきたいと思います。

３月までの大体の流れとしてはこのように考えておりますので、そのような心づもりで取り組んでいただけたらと思います。

ではまず４つのIDの議論に入っていこうと思います。事務局から何か説明があればお願いします。

岩田主任:

～添付資料２について説明～

山下恭史委員長:

まずＩＤ２８について再評価シートで私たちが判定したところでは、９人のうち６人は「計画どおり進んでいる」という担当課の自己評価は妥当であろうと。そしてお一方がちょっとこの評価はいかがなものかという評価。そしてお二方がこの評価シートの記載だけでは判定ができないとされています。全体的に見れば概ね「計画どおり」ということについては賛意を表している数字だと思います。ただ皆様のご意見やご質問もたくさん寄せられておりますので、このあたりも踏まえて再度お話を伺えたらと思います。川口委員さん、どうでしょうか。

川口委員:

この再評価をしたときに思ったんですが、鳥取市としてこの外国人観光客というものに結局どう取り組むのかなと疑問が湧きました。鳥取市は定期国際便があるわけではなくて、つまりどこか別の玄関口から入ってきた人たちを受け入れるようなところだと思います。そういう中で鳥取市は何を目指すのか、そしてその成果指標がサポートセンターの相談に訪れた人の数でいいのか、その判断が難しいなというのが率直な印象ですね。

山下恭史委員長:

この指標はどうかなと実は私も思いまして、前の委員会で、観光案内書については 16000 人ぐらいの外国人を受け付けていますので連携したらどうかと意見させていただきました。これについては今回、連携をしていますという回答になっておりますが、先ほどおっしゃっていただいたように、受付件数で本当にいいのかは検討の余地があるかもしれません。この ID の取り組み内容はこの評価シートにあるように、「外国人観光客によるクチコミ情報発信の促進、ファムツアーの対象区域の拡大検討と体験型ツアー。他国の文化に応じたメニューの新規開発」となっていて、そこでじゃあ何を指標にしようかと担当課として悩まれて観光客サポートセンターの窓口相談外国人数というようなこととは思うんですが、例えばマスコミの立場から何か良い指標の案などありませんか。

川口委員:

基本的にはこの体験型ツアーに力を入れるということは、つまり滞在時間を増やすということですよね。ですからここで食事をとられたり宿泊されたりということによる時間消費ではないかなと思います。３時間くらいの県内滞在を目標にするのか、それとも半日くらいを目標にするのかはありますが、いずれにしても滞在時間はアンケートでとれるものではないかと思いますし、それから当然宿泊を伴ったかどうかも一つの指標として考えられる気はします。

山下恭史委員長:

他にご意見はございますか。指標だけに限らず取り組み内容についても何かご意見があればと思いますが、副委員長ありますか。

山下博樹副委員長:

この再評価をしてみて、中身というよりシートの記載内容自体がですね、四半期ごとの計画と言いながら四半期すべてが同じ記載であったり、進捗状況と言いながら上半期のうちの一日二日の内容しか書かれていなかったり、これでどうやってこの計画と進捗状況が「概ね計画どおり」だということが言えるのかというのが私には判断できなかったのでそこのところでは、「計画内容の表記が大まかすぎて評価のしようがない」と書かせていただきました。

それから今話題になっていました指標の点でいえば、何を狙っているのかということと、目標を達成するために何をしているのかというのがかみ合っているのかなと。Facebook での情報発信を重視するのであればそれを見てくれる人がどれだけ増えていくかということ

が評価指標になればいいだろうし、その滞在っていうところでいえば先ほど言われたようにどれだけ宿泊してくれたかというような数値になるだろうし、その辺のところが少しずれがあるような気がします。少なくとも窓口に来てくれた人の数だけでいえば何もしなくても来てはくれるだろうからあまり今記載されている取り組み内容は数値に直結しないんではないだろうかという印象を受けました。

山下恭史委員長:

確かにおっしゃっていただいたとおりで、この評価をするにあたって、中間評価時点では中間の数値が出てきてない状況で、また年度評価の時点でも実績が出ていない中で評価しています。例えば民間企業では中間評価をするのであれば９月末で数字が分かり、それを踏まえて１０月以降の施策や行動計画を立てていくんですけども、それを思うと遅いというか、何を評価の基準に置いておられるのかなとは思いますので、そこは今後の課題として速報値を用いるなどの工夫は検討していただきたいと思います。

石畑委員:

先ほどおっしゃっておられましたシートの記載内容に関して私も同感で、やはり担当課の方の書かれている内容がその課によってかなり差があるというのが非常に気になるなと思います。私たちの感覚からするとこういった事業というのは市役所の最優先事項だと思いますので、やっぱりそこに熱意をもって書き込んでいただきたいっていうのが全体の印象です。それから観光分野に関して、割と独自に収集している情報が少ないのかなというイメージがありまして、例えば観光庁が平成２８年１１月にアンケートを行っているとかタクシー利用者のというのはあるんですが、さっきも川口委員さんがおっしゃていましたように、宿泊先と連携してかなり細かいアンケートを取るであるといった機会はあるのではないかなと思います。それからファムツアーに関しても外国人向けショップに関してもオーダーがあれば対応するとか出店するような事業はないであるとか、やはりここは観光の肝だと思いますので、そのあたり積極的に市の方が発信する何か核になる事業を一つ作られないと、市の取り組みが分かりづらい気がします。外国人だろうと国内の方だろうと観光立県のためにもう一歩先の攻撃的なやり方が見えてくれば市民も協力できるしビジネス的な動きもできるのではないかなとおもいました。

山下恭史委員長:

玉木委員さんどうでしょうか

玉木委員:

観光に関しては「事業内容と成果指標がリンクしていない」という意見を書かせていただきました。よって判定不能という結論なのですが、取り組み内容が各国文化に応じたメニューの新規開発と書いてあるのであれば、そういった新規開発を何件しましたとか、具体的な先ほどの外国人の宿泊件数が何件増えましたとか、そういった分かりやすい指標の方がピンと来るかなと思います。

山下恭史委員長:

福山委員さんもし何かあれば。

福山委員:

今皆さんがおっしゃたような内容とほぼ同じ意見ですね。鳥取市として外国人観光客に力を入れるというのは分かるんですけど、何をどこまでというのが評価しづらいと思いました。

山下恭史委員長:

今出たご意見としては、成果指標の見直しについて、それから四半期計画とリンクしていないというところなどでしたが、ちょっと次回以降どうするかというのは事務局と相談させてください。またここに関してこんなデータがほしいというのがもしあれば、担当課の方に言ってもらうようにします。もしあればあとで結構ですので事務局の方にでも言ってください。

では次に行きます。ID３７について、玉木委員さんからお願いします。

玉木委員:

私は「成果指標の目標が低い感じがいたします」という意見をさせていただいています。誘致企業１社への原料供給開始ということですが、各年１件ずつすれば達成というよりはもっと積極的な数値目標がほしいなという印象を受けています。ただ本当の大手とやるというのはかなり難しいことですので、そういう１件であればすごいなと思いますが、県外の中小企業、例えば、「居酒屋さんに鳥取市の何かを売り込みました。」で１件ということだったらちょっと寂しい感じがするかと思います。大手の誘致企業１社に対して市内の中小企業がたくさん取引できるようになりましたという１件だったら素晴らしいなという印象です。

山下恭史委員長:

川口委員さんお願いできますか。

川口委員:

目的がマッチングの件数みたいなところにどうしてもなってしまいがちだと思うので、特にコスト面の高い中山間地域ですね、こういったところを積極的に使っていって、そこの付加価値を上げていくようなことに繋がればいいなというような意見を書かせていただきました。以上です。

山下恭史委員長:

他に何か。副委員長どうですか。

山下博樹副委員長:

私は、まあ妥当ではないかと評価をしたと思いますが、ただ内容としてこういうことも含めて行政の仕事なのかなという。もうちょっと民間がやった方が上手くいくようなこともありそうな気がするというか、民間の方がこういうことはむしろ得意な分野なのではないのかなという風に思いますけど。

山下恭史委員長:

具体的にはそれは何を指して言ってらっしゃいますか。販路拡大と思っていいですか。

山下博樹副委員長:

そうですね。

山下恭史委員長:

例えば今、６次産業化と言って生産物を作って加工して販売までというような流れにはなっていますけども、残念ながらこの地域では、一部の力のある組織を除き、自社であるいは自分の農園でそこまで行う事ができないというのが一つ実態だと私思うんです。そこの中でどうしても行政や金融機関、商工会などとコラボしていかざるを得ないというのがあるんだろうと思います。かと言って鳥取市が主体的に全部やっているかというとそうでもなくて、支援機関と一緒になってやっているという状況です。私の個人の意見としては、それはある程度この地域においてはしていかざるを得ないんだろうなと思います。全部民間が行って、行政はノータッチだと言ったらたぶん上手く育っていかないんだろうなと、経験上からそういう風に思いますけども。まあもうちょっと頑張れよというのはそれは一つのご意見だと私も思いますが。

山下博樹副委員長:

米子にできて鳥取にできないとか、いろいろ気質のこともあるんでしょうけど、まあでもいつまでもというのはやはり。関わり方の問題ですね。

山下恭史委員長:

石畑委員さんどうでしょうか。

石畑委員:

私もこの項目に関してはちょっとだけ違和感がありまして。というのは３７－１の回答で「市が直接海外への販売ルートを開拓することはしていない」と書いてあるので、じゃあこの目標の新規販路開拓っていうのは何かなというのはちょっと思ったんですけど、ただその連携をとるであるとか企業の支援をするっていうのは行政としては一番大きい役割なんだろうなという風に読ませていただきました。評価シートの内容自体には非常にたくさん担当課の方が書き込まれていて、一生懸命やってらっしゃるという印象が強かったので妥当であるという回答をさせていただいたというところです。

山下恭史委員長:

福山委員さんお願いいたします。

福山委員:

私は１０年間このことに携わってきている中で、毎月頑なに米や梨やキュウリを大阪まで運んで販売しています。今は大阪の空堀商店街というところで毎月１回市を出して、ようやく４～５年目からトントンまでで、儲かるところまではいかないですね。これは南商工会の予算がついて実施できているんですけども、ただこの予算がなくなれば続けられる

かどうかきわどいところにきています。とりあえず３月までは予算がついているからやろうと。４月からは商工会の予算がどうなるかわからないということなので、我々の実際出る人件費と大阪まで交通費や燃料代を考えてみたところ、姫路でやる方が良いんじゃないかという意見があって、試しに姫路でもやりだしたんですね。大阪と姫路の２班に分かれて。そうしたらやっぱり姫路の方が現実的だということになりました。これでもし商工会の予算がつかなかったら空堀はもうダメになるかも知れないけど、予算がつかなくても姫路はいけるなと考えています。なので販路拡大については、それに関連する予算を維持していただくことと、同時に主動する人間を探していくことが大事だと思います。

それから私は、人の交流や物流から考えて近隣の都市部と結ばれることが唯一の生き残りだということをずっと言いづけています。そこでいくと中之島のアンテナショップ、ずっと真面目に続いているっていうのは市のお仕事としてはすごいと思っています。

それと、この ID での市の事業と農協がしていることがどう違うかという質問への回答にあるように、ここの産物の８～９割は農協がやってるんです。それで事足りてるんです。残りの１～２割のものをどうやって運ぶか。どうやって農協に出ないもの出せないものを出していくかというのを考えないといけないと思います。もちろん中山間全体の産物を売ってしまうということを考えれば農協は農協ですごく評価しないといけませんが、このような事業をエンドレスに続けていくと。やっぱりここに書いていただいているような予算付けをできればし続けていただくっていうことが仲間をたくさん呼び込んで成功する可能性につながると思います。

山下恭史委員長:

福山委員さん、もう一つの取り組み内容に「高値販売の輸出ルート確保」というのがあるんですが、その辺についてのご意見とかご感想がありますか。

福山委員:

用瀬で日本財団さんの補助を受けて事業をしていますが、２月の終わりに中国の広東省に行ってきます。香港につよい女性がつてにいるもので。やっぱりそういう形で人脈を使ってやることが大事だと思います。これは県で輸出の関係を熱心にやっている部署があり、そちらの方が窓口となって努力くださっています。市の方はあまりよく知らないけれども県の方はかなりの勢いでやろうとしている担当部署が出来ているので、今後も輸出関係は伸びていくんじゃないかなと期待はしています。

山下恭史委員長:

事務局にお願いしたいんですが、取り組みの中に「国外への新規販路開拓」と「高値販売の輸出ルート確保」というのが入ってるんですけども、取り組みの状況と、県やＪＡとの連携の状況がわかる資料をもらえたらなと思うんですけども。これを見る限りではちょっとそこに全然触れられてないので。

岩田主任:

ちょっとその辺の説明がここからは読み取れないので、資料や説明がいただけるものか

担当課に相談してみます。

山下恭史委員長:

　あと先ほどもありましたけども、この成果指標のマッチング数というのがいかがなものかなと思いますが、玉木委員さんどうでしょうか。

玉木委員:

　他の指標を挙げるのもなかなか難しいですけど。

山下恭史委員長:

　逆にその、地元の業者さんがどれだけマッチングできたかの方が良いかもしれませんね。例えば一つの企業さんに１０社マッチングできたとか。鳥取市側の指標の方がより実態が分かるかもしれませんね。大手企業だろうが小口の飲食店や販売店だろうが含められますから。そういう面でいえばやはりマッチング指標をもう一回検討しないといけないかもしれないですね。

　他に意見はありませんか。なければ次に進みたいと思います。では次はＩＤ３８に入ります。

山下恭史委員長:

　まず私から一点。ここの成果指標のところで、平成２７年度で４７、平成２８年度で５０とありますが、これは累積ですよね。

岩田主任:

　これは累積です。

山下恭史委員長:

　ということは平成２８年度が５０になっていますので６社増やそうという見方をすればいいんですよね。

岩田主任:

　そうですね。

山下博樹副委員長:

　ちょっと質問よろしいでしょうか。今の４６とか５２という数字はその年度にしている企業の数なのか、それとも新たにその年で６増えれば、例えばその前の年ではやっていたんだけれども今年になってやめちゃったというようなところはマイナスせずに、ただ新しくやったところだけを足していく数字なのか。ちょっとその数字の指している数の中身が分からないんですけど。

山下恭史委員長:

　多分やめたのは減らしてないと思いますよ。

岩田主任:

　ここで取り組んでいる担当課の事業は、新しい食品加工、商品開発に取り組むところに補助を出すようなものなんですが、流れとしてはまず事業者から申請を受けて、実際に事

業化できそうかというのを審査会を開いて審査します。そして大丈夫だろうというところに補助していくという形になります。ここの指標は今までに審査を通って実際に開発に向かった数なので、今言われたようにじゃあそれがいま商品として売り続けられていますかっていうところは後追いが実際出来てない状況です。担当課とは、今後できる限りで後追いができないかというところは話をしているところです。

山下恭史委員長:

だからおっしゃっておられたように、食品加工業育成事業補助金の交付申請をして採択なりされて事業に取り組むのは当然入っている。で、採択になっていないけども事業化されるところもありますよね。それは入らないですよね。

岩田主任:

そうですね、市に相談なくされているところはたくさんあると思いますが、今の考え方はその補助金の件数ということになります。

山下恭史委員長:

それは入らないですよね。拾いようがないっていえば拾いようがないですもんね。そうしたら６社と仮にあるけれども、６社っていうのが多分補助金のマックスだと思うので、その６社をプラス２０社には絶対できないわけだ。この成果指標では。

山下博樹副委員長:

先ほど私が申し上げたのは、そこの累積にしていくことに違和感があって、あくまでそれぞれの年度に新規に事業化した、商品化した事業者の数っていうのであれば６なら６で良いと思うんですけれども、やめちゃったところも含めてその数は消さずにずっと積み重ねていくっていうのはそれはどうやってもうそでしょうという風に感じました。

山下恭史委員長:

川口委員さん何かご意見ありますか。

川口委員:

そうですね基本的には僕らの感覚から言わせていただくと、別の事業でフォローしている部分もあるとは思いますが、開発・販売促進で一定の補助をして、商品を作るっていうところなんですけれども、先ほどからちょっと出ていますようにそのあとの後追いっていうところっていうのが実は一番大事なわけでして、そこにこういう事業が発展していかないものかなっていうのは思います。つまり１年２年受けた後、次のステップみたいなものがあって、そこの場合は販路開拓という部分を入れるというのはどうかなと思います。私も大阪だとかそういうところに追跡取材みたいなものをしたことがあるんですけれども、そのときにとっても説明する人が大事なんですよね。マネキンさんと言われている人ですがこの人がすごく大事だったんですよね。これはＪＡ鳥取西部が売っている大山のふもとで作ったお米の話なんですがとても売れているんですよね、そして驚いたことに買う方も詳しいんですよ。白濁していると高温障害だからこれは買わないとかって言って、で実際に売れているお米を見ると精米した年月で分かるようになっていて新しいお米を消費者さ

んは買っていくっていうようなところだったんです。ではそこで何が大事なのかっていうと今言ったようにマネキンという説明する人だったりするわけです。であれば、そのあたりをどうフォローするかっていうところとか、この新規開発の助成事業はいいと思うんですがそういう次のステップの視点も必要なのかなという気はします。

山下恭史委員長:

福山委員さんどうですか。

福山委員:

要するに６次産業のことがこのＩＤ３８では言われてると思うんですけれども、私も用瀬ファームという団体で特別栽培米を用瀬で作り初めましてね。そこでびっくりしたのは『わったいな』で米がどんどん売れるんですね。担当者に聞いたらすごく売り上げが伸びてるっていうんですよ『わったいな』自身が。県外のお客さんに３合入りの小さいパッケージのコシヒカリときぬむすめが飛ぶように売れてるんです。そういう風に『わったいな』だけ見ても県と市とが育てた業者のものがどんどん売れて、これは効果が出ている部分がたくさんある。だからこれを続けることっていうのはすごく大切かなという風に思ってます。それで私事ですけど１０年間ずっと関西の交流活動をしてきた中で、一番最初に１００万くらいの補助金をもらえました。で、この話を村で飲みながらしたら税金泥棒って言われたものです。ただ後日そこの担当課長と話した時に「行政は市としても県としてもやりたい事を有能な人にやってもらって、この１００万円で１００万円以上の効果を上げるっていうのが大きな意味で税金の使い方の一つなんだ」ということをおっしゃってくださって。だから補助金をもらうこと自体が悪いことではないし、これを活かしていくことが大事だと思います。そういうことからしたら補助金の追跡調査がどこもされていないんですね、これは甘いと思います。私も補助金を受ける側だからわかるんですが、手を抜いてやろうと思えばいくらでも抜けるんです。だからそういう面をもっときちんと追跡して効果のある補助金はどんどんやるとその補助金として出した何百万、何千万が本当に成果を生むと思います。

山下恭史委員長:

あの『わったいな』の話が出たのでちょっと話しますけども、あそこの全体の売り上げは、公表されている数字でいうと平成２６年度が４億７千万、平成２７年度が１億増えて５億７千万なんです。でそこで何に力を入れておられるかと聞くとやっぱり情報発信を常にしておくということだそうです。イベントもたくさんしていますが、それは単なる客寄せイベントじゃなくって農産品を必ず売るためのイベントにしようというのを心がけているという風に言われて、なるほどなと思っています。川口委員さんがさっきおっしゃっておられたけども、それに加えてきちんと商品の説明ができるというのがあるから、ここまで今なっているんだという風に思います。私も、市とか県が梅田とかでフェアをするときに行ったりするんですよ。そのフェア開催の時は確かに行政の補助金もあったりするので幟も立ってマネキンも客寄せも上手にやっているんですが、後日今度は個々の事業者さん

が行っても売れないということを目にしました。その時は梅田の阪神の地下でしたけども、やっぱり食のみやこ鳥取っていう幟が立ってるんだけども、商品説明の人が誰もいない、要するに普通のマーケットと一緒の状態であるっていうとほどんど手を付けない、見向きもされないっていう状況なんですよね。だから本当にイベントをしたときに鳥取産品のこれはいいんだよということを分かってもらわないといけない。そうじゃないとフェアのように安い時には来るけどそうじゃなければもう後は別に鳥取県でなくても愛媛県のでもいいし和歌山県でもいいということになりかねないので、やはりいいものは継続的に情報発信しつつ、さっきおっしゃっていたようにフォローしていかないとたぶん継続的には売れないんだろうなと思います。

それから「地元新商品の開発支援」ということになってるんですけども、例えばこの鳥取地域であれば大丸の下。いわゆるデパ地下と言われるところやこの近くだとまちパルやわったいな、砂の美術館。こういうところに地元産品て結構おいてあるんです。結構新しい商品、例えば黒らっきょうもそうだし黒にんにくもそうです。らっきょうのフルーツのやつもあります。梨のドレッシングもあります。あるいはお菓子もあります。で、これ以上に何を新しく商品開発するんだっていう想いが個人的にはありまして、今あるものを活かしていくっていう努力が一方では必要なんだろう思ってもいます。事業者単独ではしきれていない PR の部分を。ここはぜひ担当課の方と議論してみたいと思っています。

福山委員:

確かに商品の開発はいいとこまで来ているけどやっぱり販売力。どうやって売るのかっていうところですね。一つの例として、もさえびせんべいっていうのがあって、あれは私の友達がやっているんですが、徹底的にお金かけて全国制覇するぐらい置いたんです。そしたらガーンと売れるようになってきたと。そこの社長は覚悟をもってその戦略に出たそうなんですが、いくら覚悟があってもお金がなくてはそんな方法もとれないというのが現実だと思います。そこらをもっとちゃんとしたテーブルで議論して、無駄遣いのないような販売方法っていうの見つけていきたいですね。

それから３か月に１回農業人フェアっていうのがありまして、本来農業の勉強なんですけど農家じゃない人もたくさん来ます。この人たちは農業をまちおこしに利用して金儲けしようっていう人がきますからね、こういうことからしたら売り込みの相手はいくらでもいると思います。

山下恭史委員長:

他に意見があればと思いますが、まあ指標のことについてもやっぱりこれも疑問のご意見もありましたので、少しちょっと次回どうするかをまた事務局と話しさせてください。それまでに何かご意見等があれば事務局の方にでも結構ですし、こんな資料がほしいということであれば引き続き事務局の方に行っていただければ結構です。

では続いてＩＤ７５に移ります。これについては担当課の「計画どおり」となっております。「砂像のまちとっとりの推進」ということですけども、委員の方は７名の方がまあそ

うだろうという判断。そして判断が違うと判定されている方はいらっしゃいません。でお二方はちょっと判断がつかないということです。玉木委員さんからご意見伺えますか。

玉木委員:

私個人はここは担当課の自己評価は妥当という形にさせていただいて、特段意見もつけさせていただいてないところです。砂の美術館の入館者数が５０万ということで、なかなか５０万を維持していくのも大変だと思いますので、それこそイベントなり情報発信が必要になってくるのかなと思います。国内砂像選手権大会の決定ということなのでちょっと内容まで分かりませんけど、そういったイベントがますます重要になってくるんだろうなという印象です。

指定管理者、観光コンベンション協会さんだと思いますけど、そちらと連携しながら取り組みを継続するとありますので、継続していただきたいなという意見です。

山下恭史委員長:

委員の皆さんの意見としては、目標に対する進捗については担当課の考えている通りということだと思います。ただ、砂の美術館だけでなくて、このエリアにおける、周辺も含めての観光をもう少し増やす努力がいるんではないか、あるいは増やす努力をしてほしいというようなご意見が多いんではないかなという風に感じます。

他に何かご意見があればと思いますが。川口委員さんどうですか。

川口委員:

ブランドとして定着しているということは理解できますが、地域の地元人材の巻き込みみたいなものが必要ではないかと思います。砂の美術館もハコモノですからいずれ建て替えという話が出てくると思うんですよね。その時に入館者数が少なくなってきて存続がどうだっていう話になっていくんじゃないかという懸念があります。それだったら今は国内や世界の一流の人たちを呼んできてやっていますが、それだけじゃなくて地元の巻き込みも増やしているっていう姿があるといいんじゃないかなと。確かこれは前市長さんが砂像文化だという風におっしゃっていたと思うんですけれども、じゃあ実際に文化になっているかっていうとまだそういうところまでは醸成は至っていないと思うので、地域の文化としての定着度みたいなところを上げていくっていうのは一つ方法としてあるんじゃないかなと思います。それがひいては次のリニューアルだとかそういうところにも繋がっていくのかなという気はします。

山下恭史委員長:

石畑委員さんどうですか。

石畑委員:

実は先日、県外にいる妹が久しぶりに帰ってきたので砂の美術館に行ってきました。とても良い施設なんですけど小さい子供がいるので、周辺を移動するのが非常に難しくて、端から端までが非常に長いので、やっぱり活用しきれてないんだなという印象でしたね。

でも砂像を見た時に非常に良かったので、これを本当に今後上手く使えばとても良い施設なんだろうなというのを改めて実感したところです。もともとこの施設整備でうちの業界で仕事として協力することもあったものですから、やっぱり地元の業者がそういった形で協力ができて、誇りを持っていける施設っていうのがなかなか鳥取市には他にないと思うので、今後いい形で使っていけたらなと思ったところでありました。なので周辺施設、特に移動ですよね。どこにターゲットを絞るかですけど、子供たちが来た時に優しい施設であるのかさっきおっしゃっていたように地元を巻き込んでやっていくのか、やり方はいろいろあるんだろうなっていう風に思いました。３年～４年経ってきてここからもう一歩施設としてもう一度成長していく仕組みづくりっていうのが多分必要なんだろうなっていうのを思いましたのと、ただ、中のお土産屋さんで働いている知り合いの方がいまして、ものが売れないってとっても困ってらっしゃったので、さっきの商品開発の話になっちゃうのかもしれないんですけどたくさん人は来るんですけど中でモノが売れないっていうことをおっしゃっていたので、そこは地元の方々もいい形で中で頑張って企業努力をしていけるっていう何か仕掛けづくりを全体で見て考えていかないと、個々の業者さんで本当に１人２人でやっているお土産物屋さんもたくさんいらっしゃるので、そこを何かノウハウを一緒にみんなで考えるとか一体化したそこでもお金を落としていただける仕組みづくりができると市民も観光の方も喜ばれるのかなっていう風に思いました。ただ海産物屋さんが２軒ほどで来ていてとっても盛り上がっていたのでこれからもいい形で発展していけたらなと思いました。

山下恭史委員長:

他にどうですか。副委員長どうですか。

山下博樹副委員長:

今言われたようなところだと思うんですけれども、この美術館を作るという話が出た時に、砂丘に作るということを聞いて、なんでそこに作るのかなと思ったんですね。要は回遊性が難しくなる。他の観光関連の資源とどうやってこう見て回ったりとかするのかなっていうのが、そこが多分課題になるんだろうなとその当時思っていて、今言われたようにそういう課題が残ってるっていうところが一つあるのかなというのと、それからプロジェクションマッピングなどのイベントのほか、砂像製作体験コーナーやいろいろ整備してますというようなことなんですけど、こういうことをやっているっていうのを知らなかったんです。そういう情報が少なく、市民の中ででもあまり知らない、まあ私だけが知らなかったのか分かりませんけども、もうちょっと上手にPRも含めて回していくことが必要なのかなと。まあ私も一度しか行ったことありませんけど、ああなるほどこういうもんなんだって思いましたけれども、やっぱりあの入場料を考えると新しいものができたからと言って毎回毎回行くっていうようなものでもないなという風には思ってですね、じゃあそのへんどういう風に、一見さんばっかりが来てくれればいいっていうものなのかその辺どういう風な戦略でこれを活用していこうとしてるのかなというのが、ちょっと分かりにくいよ

うな気はしています。ただ入館料とかの収支だけで見ればトントンでやっていけているんだから、これをもっと上手に活かせたらいいんだろうなという素朴な感想です。

山下恭史委員長:

このＩＤについては皆さんから特に否定的なご意見はなくって、逆に５０万近く来られる入館者の方をいかに歩いてもらうかというか、周辺の施設はもちろん、中心市街地まで来られるかどうかは別として消費に結びつける努力を市の方も考えてほしいし一緒に事業者の人とも考えないといけないんだろうなという風に思います。入館された人はほぼあそこの売店に行かれるはずなので、そこの物販のことについてももう一工夫いるのかもしれません。ただ、３階で売っている記念のホルダーみたいなグッズがすごい売れているらしいんですよ。

福山委員:

私が関西からお客さんを連れてきたときにどこに行くかっていうとまず砂丘なんですね。鳥取県は、西の妖怪と中のコナン、東の砂丘といって、この３つのなかの一つに挙げられるくらいのものなんですね。その砂丘のこの砂像っていうのはね、新しい人も来るんですけどもリピーターも来ます。一番いいのは一年間に１回テーマが変わるっていうところですね。先ほど何度もは行けないというご意見もあったけども好きな人は今年はこれで、来年はあれでと。収支はどうかとしても、そういう戦略も含めてこの砂の美術館の建設は大ヒットだと私は思います。こういう集客の核になるものができたので、あとは交流っていうことで、ただ見て帰るんじゃあね、宿泊が皆生や城崎まで行くんじゃ芸がないじゃないかとは思います。ですから私は関西からのお客さんをうちの民泊に泊めて、そこに入れない数のものはレーク大樹。あそこは湖山池が見えて案外いいんですよ。それに民間がやるとやっぱりあれだけ違うんだっていうくらいサービスも料理も良くなりましたから。あとは今度ホープスターがどうなるかっていうこともあるでしょうが、もっとそういう、砂像を見てせめて鳥取市で一泊してもらうという直結させた観光に力を入れてはと思います。とにかく砂丘と砂像はまずお客さんを連れていく恰好の場所なので、より人気を高めるために知恵を使う時期に来たんじゃないかなと思います。

あとちょっと気になるのはですね、まあ平成２５年の収支はいいんですけども平成２６年の収入が２億２千万で支出が２億７千万でちょっと儲けが少ないというか支出がちょっとね。という感じですね。まあ高いレベルの彫刻家集めているからいろいろいるでしょうけど、もうちょっと儲ける工夫をねする時期が来たんじゃないかなと。５０万の来場者があるわけですから。

山下恭史委員長:

ここについても重点的な項目なので、じゃあ具体的にどんなことをやっていったらいいかなっていうことも含めてですね、連携も含めて、福山委員さんもおっしゃっているように誘客とのこともあったりしますし、あるいは泊りの問題もあったりするでしょうからこ

こは引き続きもう一歩進めた議論を次回したいという風に思いますので、もしこんな資料がほしいということがあればこれも事務局の方におっしゃっていただければと思います。

とりあえずよろしいですかこのＩＤについては。次に進もうと思いますので。今日のところは４つの ID 関係のところはこれで一旦区切らせていただいて、次の議題もあるのでこれは事務局の方からお願いします。再評価結果の報告ということで。

岩田主任:

再評価結果の報告ということで、Ａ３横の資料３をご覧ください。

～以下、資料説明～

山下恭史委員長:

ありがとうございました。次回も今日取り上げました４つのＩＤについては引き続き議論を深めていくあるいは広げていくということをやっていくのですが、たぶんそれだけをしていたらもったいないので、この中から、委員会で議論してみたいテーマを上げていただければと思います。当然全員の希望が叶うかどうかは調整をする必要が出てくるとは思いますが、遠慮されないで個人的な要望で結構ですし、選ぶ参考になるような資料の書き方を事務局がしてくれておりますので、まあ計画を下回るんだったらなんで下回るんだということになるんでしょうし、計画どおりって言っても委員さんではいかがなものかという判定をされてる方もいらっしゃるので、そんなことも含めていかがでしょうか。

山下博樹副委員長:

再評価のシートについて、これだけ大勢の人間が時間をかけて丹念に見てこういう風にまとめていただいたんですけども、これを担当課に投げて、例えばこの再評価のシートを再修正をして見直しをしてもらって、答えるような形で加筆してもらうっていうことは考えないんでしょうか。

岩田主任:

先ほど言われていたように書き方が大まかすぎて分かりませんよですとかたくさんいただいて、それについては一応目標としては次の年度評価が３月末にありますので、そのときにいただいた意見を参考にして、もう少しわかりやすくなるように書き方を工夫していけるようにしたいなという風に思っています。

山下博樹副委員長:

でそれがまたできてないとその次の半年後になるんですか。それだとずっと順繰りになるだけで変わらないところは変わらないと思いますけど。

坂本課長:

年度中途での修正は難しいと思いますね。

山下博樹副委員長:

修正でなくても加筆でもいいんですが。

坂本課長:

加筆であっても、今までの議論で言われているのはだいたい成果指標が妥当じゃないと

いう意見が大半で、成果指標は最初に設定しているから数値が取れてるんですけれども、それが最初から設定されてなければ途中で数字を遡って取ろうと思っても取れないものもたくさんありますので。

山下博樹副委員長:

いや、私がこれで意見を書いたのは指標のことではなくて、どういうことに取り組んでるのかとか、計画も四半期全部一緒の表記というところはもうちょっと書きぶりだと思うんですよね。そこのところはもう少し細やかに加筆していただくことは、もうちょっとそれぞれの中身の細目的なところでこういうことをやったっていうのは書いていただけると思うし、もう少しその実施した進捗状況のところでも書きようがあるでしょうというようなことがいくつもありましたので。

坂本課長:

まあ分かるんですけども、今はまだ途中で言われた意見で、最終的にこの委員会として年度末にどう意見するかというのを採択されたわけじゃないので、その現時点の個々に言われた意見を途中の段階で反映するというはやっぱり難しいと思うんですね。年度末にまとめられたものについて次年度にそこを反映していくというのは容易に対応できるとは思うんですけども、今言われている意見が、委員会の総意でもないことも考えられるのでそこを全部踏まえて修正しなさいと言われてもそれはちょっと難しいですね。

山下博樹副委員長:

委員会の総意でもないと言われますと、じゃあなんでこういう作業を私たちにさせたのっていうことになってしまうので。

坂本課長:

それは委員会の総意を最終的に決めていただくための途中の作業であって、その一人一人の意見を全部こちらの方で受け止めて全部を反映させるのはちょっと現段階では難しいかと。

山下博樹副委員長:

いや全部とは言いませんよ。できることもあるんじゃないですかと。

坂本課長:

そこを決めていただければできますけども。今言われた部分のところは委員会での決定事項ではないものもあると思われますので、今の段階でそこの修正を各課に強いるのは、ちょっとうちとしては行革に反すると思いますから。現場の作業をなるべく簡素化したい、現場の作業をなるべく少なくしてあげるのが行革だということもうちは思ってますので、拙速に依頼をかけて、あとで元に戻すなどということは極力避けたいと思います。

山下恭史委員長:

確かにおっしゃるとおり指標を途中で変えるっていうのは難しいと思うんですよね。だからどこかでこういう指標はどうですかと言いつつ、当然庁内でコンセンサスを得ていることなので今の指標を使ってもらわないといけないと思うんですが。でもこういう指標も

あるんではないですかということも少し検討いただきたいと思いますし、新しい年度の目標を決める時点でそれを取り入れるかどうかはもう一回議論していただくということになるだろうなと思います。この委員会は最終的には平成３０年度３月まで続くので、この会で検討できるものはきちんと検討していきますし、できないものは意見の羅列になってしまうかも知れません。そこはちょっと流れだと思います。もう一つあるのは先ほども申し上げたんですけども、早くサイクルを回してほしいなと思いますね。中間だったら中間のところで見込み数値でも、取り組み実績でもできたら出してほしいと思います。委員会の日程とのアンバランスなところもあるかもしれませんけどもできるだけそれはしていただかないと、何も出てきていないのに私たちは再評価をしないといけないという、それこそ無駄なことになりかねないので、できるだけそこは早く、どういう言い方をしたらいいか分かりませんが、念頭に入れながら。市の担当課が自分たちでこれをやろうと、今年の四半期はこれをやろうと決めたことなので、それはできるだけ早くやっていただくと、そしてできてないところについてはそれこそ行革の担当課の方でちょっと尻を叩いてもらってということがないと大綱自体を決めた意味もなくなるということになり兼ねないので、そのあたりは副委員長さんだけじゃなくて他の委員さんも思ってらっしゃるところもあると思うので、そういう風に努めていただきたいと思います。

坂本課長:

今おっしゃられたことで、資料３の黒四角が皆さまの意見で、ここを反映する必要があるとは思うんですけれども、委員さんの中でも一方では評価されもう一方では評価されていないものあるように見受けられます。そこの部分については全部しないということではなくて、見させていただいて途中でも対応できるものについては対応させていただくと。で、対応できない場合はそれがなぜできなかったかというのを説明するのもうちの説明責任だと思いますので、そこは担当課に投げてできるものはしますけど、言われたようにここに全部あるんだから全部やってくださいということはちょっと難しいですねということだけ最初に言わせていただきました。

山下恭史委員長:

個々の意見をとりあえず挙げていただいているんですけれども、この意見というのは私の個人的なものも含めて勘違いしているものもあるかもしれない。あるいはそもそも難しいっていうものがあるかもしれない。それがとりあえず羅列的になっているんですよね。これは過去の委員会でも一つの成果をまとめるときに意見調整をしてきませんでした。時間的なものもあるかもしれませんけれども、これは必ずしも良いということではないと思うので、できるだけ一つのテーマについて委員会の意見は集約できたらしたいなと思っています。ただ絶対に私のこの意見は残したいというのは併記と言いますか一部意見があったくらいのところで書けばいいと思うし、でも皆さんの意見を最終の平成３０年３月時点で羅列的に報告書という形することはできるだけ避けたいという風に思っています。委員会の中でできるだけ議論したいと思います。ただ議論ができないものは仕方がないので羅

列的に書かざるを得ないかもしれません。だけどやっぱりこうして顔合せて議論してるんですから、議論の意味っていうのはまさにこの場にあるので、そうじゃなかったらアンケートを取って羅列していくだけで済むわけですので。他のセクションではそのような進め方をしているものもあるようですが、それと一緒になってはこの行革の委員会の意味がないのでそこは議論していこうと思います。とにかく中身のある議論ができるように是非当初の担当課の目標に向かっての進捗管理というか評価シートの書き方のところは是非行革の方できちんとしておいていただいた方がこの委員会としてもきちんとした議論ができるんではないかなという風に思います。

坂本課長:

先ほど岩田の方から、黒い四角については回答を返させていただくということを言いましたので、その中で先ほどの中間評価の内容も見え消しで修正可能なところは修正してできるだけお出しするようにします。

山下恭史委員長:

他にないですか。

川口委員:

先ほどの事務局さんの話を伺っていて思ったんですけど、こうやって違う分野の人がしかも忙しい中時間を割いてやっているので、何ができないではなくてこれだったらできるっていう方向でできるだけ答えていただきたいなと思います。じゃないとなかなか生産的な議論、建設的な話になっていかないと思うので。できないことはできないでしょうがないとは思うんですけれども、これだったらできるという方向に持っていかないと次の話に進まないのでできるだけこの場ではこういうことだったらできるというような前向きな話をお願いしたいなと思います。

山下恭史委員長:

他になければいいですかこの再評価については。では次の時にいくつか取り組みたいものを挙げたいんですが、もし無いようだったら事務局と相談でということになりますけども、あと５分ほどあるので、一つだけでもいいですおっしゃっていただければと思いますが。玉木委員さんから順に。いかがですか。

玉木委員:

判定が妥当でないところとか判定不能が多いところはピックアップしたらいいのではないかなと思います。

福山委員:

今すぐにはちょっと。あとで事務局にお電話するような形で。

川口委員:

私もちょっとあとで。

石畑委員:

私がお聞きしたいのは検討中止された内容について、ＩＤ６６で判定がこちらの方が妥

当ではないと考えたものであるとか、ＩＤ４７なんかにも「検討の結果中止」とありますけれども中止された理由が分からなかったのでお聞きできたらと思います。

山下博樹副委員長:

皆さんが言われたようなことで。

山下恭史委員長:

ではちょっとそこを中心に考えてみましょう。

じゃあ次に進めさせてもらいます。その他について事務局の方からお願いします。

4. その他

岩田主任:

ありがとうございます。最後に日程調整ということで次第に書かせていただいておりますが、今日お配りした紙に、今分かっている範囲で書いてお出しいただけるとありがたいなと思います。

山下恭史委員長:

じゃあこれは帰るときに書ける人は書いて出すということにしましょう。

それではちょっと時間オーバーしましたけども、これで第３回の委員会を閉会したいと思います。次回は１月から２月の最初の辺も含めたあたりだという風に思っておりますので、ぜひそれまでに今日の皆さんのご意見や質問をちょっと大変だと思いますけどもまとめていただいてですね、それからもう一つ次回のテーマを選ぶということもありますので年末年始で大変ですけどもよろしくお願いします。委員さんにとっては忙しい時に本当にありがとうございました。もう少し年末まで日数もありますけどもご健康に留意されて良いお年をお迎えください。ではこれで委員会を終わります。ありがとうございました。